

新潟教育会報

第94号

公益財団法人新潟教育会
(新潟教育会館内)

代表理事 濱中 力也

〒951-8104

新潟市中央区西大畑町590番地3

TEL・FAX 025-222-2971

URL <http://kyouikukai.jp>

E-mail 事務局 jimu@kyouikukai.jp

研究所 kenkyujo@kyouikukai.jp

休館日 月曜日

令和三年度・令和四年度の 【教美展】は… 情報デス!!



教美展実行委員長

日 諸 博 美

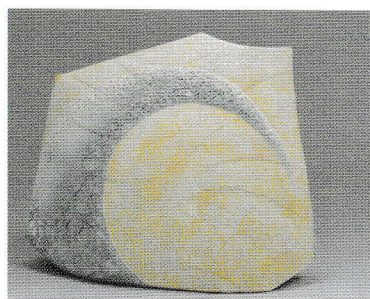
これまで【教美展】の会場として利用してきた【県民会館】が、今年九月から工事に入り、令和三年三月末まで全館休館となります。令和二年度【第二十四回教美展】を六月に開催することとし、その準備を進めていた矢先、新潟にも新型コロナウイルス感染者が認められました。やむなく今年度の【教美展】開催を断念し、関係者や関係諸機関に中止の旨をどうにか連絡し終えたところへ、またもや県民会館から新たな情報が入りました。何と県民会館の全館休館期間が、更に一年延びて令和三年度末まで利用できなくなったのです。令和三年度には中止となった【二十四回展】の開催をと考えていたのですが、それも叶わぬこととなってしまいました。急遽【臨時小委員会】を招集し、令和三年度以降の【教美展】の開催について検討を進めてきたところですが、次のようにそれぞれ決定させていただきました。

◆令和三年度↓会場【県民会館】が使えないことから、作品展としてではなく、【作品写真集】的なものを作成し、作品展に換える。

◆令和四年度↓これまでと同様の形で【県民会館】を会場に【第二十四回展】として開催する。先日、会期決定の連絡が入り、令和四年十一月二十一日に作品搬入・展示、翌二十二日・二十八日の開催となりました。

令和三年度予定の【作品写真集】編集に係る詳細案内等をお待ちいただき、奮って参加くださいますよう。お待ちしております。

出品予定だった作品紹介②



冬、日本海（陶器）桜井敏勝

尾畑留美子様 インタビュー

※インタビュー内容は、
2～3ページに掲載



尾畑留美子様のプロフィール

「真野鶴」五代目蔵元

1965年 佐渡生まれ

2014年 「学校蔵プロジェクト」
をスタート

2017年 NHK「Direct Talk」に出演

2019年 新潟女性活躍アワード
を受賞2020年 the Japan Times
「Satoyama award」大賞

きき酒マイスター

●著書『学校蔵の特別授業
～佐渡から考える島国
ニッポンの未来～』
(2015年/日経BP社)



尾畑留美子様を 訪ねて

本年度、コロナ禍の影響で「夏季大学講座」は中止になってしまいました。
先日、ご講話をしていただくことになった尾畑様をお訪ねしてお話を聞きました。

訪問日

令和二年八月一日(土)

インタビューア

新潟教育会

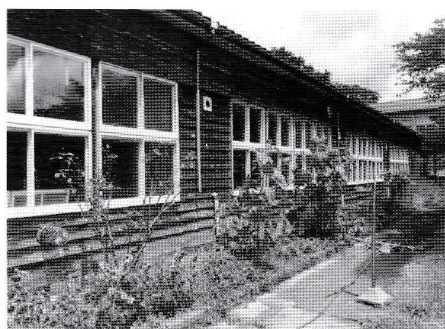
代表理事 濱中 力也

旧西三川小学校の校舎を利用した 「学校蔵」の取組についての想い

私の主人が、これから数年の間に廃校になるという佐渡市内のすべての学校を回るという佐渡市PTA連合会の取組の中で西三川小学校に巡り会った。主人の「とても美しい学校で、無くなってしまう



インタビューの様子



無くなってしまうのはもったいない
美しい学校

学校蔵運営の四つ柱、「酒造り」「学び」「共生」「交流」について

冬場は本場で酒造りをしているため、夏場(五月下旬から九月)に学校蔵で酒

うのはもったいない。西三川小学校での酒造りを考えている。」という言葉に、内心難しいのでは?と想いつつも行ってみた。

丘の上から見る学校は「日本で一番夕日がいっぱいな小学校」と謳われた校舎で、地域の人々の思いがこもった場所だと感じ取れた。この学校を残したいという想いに駆られ、「学校蔵」のプロジェクトがスタートした。

実際に動き出すと、免許のことなどクリアしなければならぬことが多く簡単ではなかった。

廃校になった翌年二〇一一年に東日本大震災があり、マーケットも不安定となり、少し遅れて二〇一四年のスタートとなった。酒仕込みの場所は改装したが、外観含めて内部もなるべく学校らしさを活かしていきたいと考えている。

造りをしている。酒造りにはオール佐渡産をコンセプトに、佐渡産のお米を使う他、酒造りのエネルギーも太陽光パネルを用いて再生エネルギーを取り入れている。酒造りを通して佐渡島の環境を見える化し、自然環境との「共生」というメッセージを届けるためだ。

様々な企業や組織、高校、大学等とのコラボレーションワークショップを実施、特に、毎年六月に開催している「学校蔵の特別授業」では多くの参加者が集う。

二〇一九年は、講師に藻谷浩介さん(日本総合研究所調査部主席研究員)、玄田有史さん(東京大学社会科学研究所教授)、出口治明さん(立命館アジア太平洋大学学長)らを迎え、島内外から二〇名ほどが参加して、「佐渡島から考える、人が減っても出来ること」をテーマに実施した。課題先進国である佐渡は課題もいっぱいあるけれども、逆に言うと、課題解決の機会もいっぱいある。佐渡だからこそのポジショニングでいろいろなことを考え、解決のヒントを探ることができれば、大きな島国である日本の未来にも役に立つのではないかと考えている。

学校蔵の授業で大切なことは多様性で、高校生、農家、上場企業、留学生、大学教授等々、一〇代から七〇代までいろいろな方が一緒に学んでいる。懐かしい教室に入ると、皆さんが「立場という鎧」を脱ぎすてフラットな生徒の立場になる。

世代の違いで、それぞれの考えが違うこともあるが、考えの違いこそが化学反応を起こすタネである。その時に、自分の経験知の中でもやもやしていたものが



未来を変える特別授業を目指して

言語化されていくということが起こると思う。そういうハッとする瞬間を得られるというのが、授業のいいところだと思っている。

何かの気づきがあれば、アクションが変わり、アクションが変われば、明日が変わる。明日が変われば、未来が変わる。未来を変える特別授業になっていければいいなあと思っている。

今、地方が消滅するという 問題について

人口が減っているのは地方だけでなく、国全体の問題でもある。人口減少という憂いが日本全体を覆っているのは間違いないと思うが、実際にはそう簡単に消滅するということはないと思う。

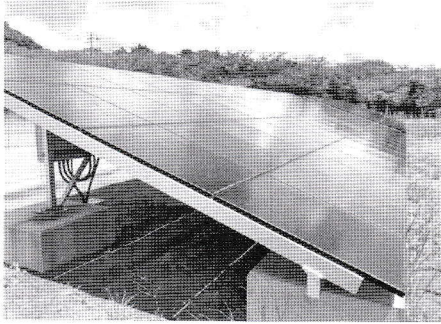
江戸時代などは日本の人口はもともと少なかった。最適な人口がどのくらいかということは誰にも答えられない。例えば、水が半分になった時に、「もう半分しか無い」と思うか「まだ半分ある」と思うかの違いでもある。人口減少を過度に怖がらずに視点を変えらるということが大事だと思う。人が減るということに関して

も、表と裏の考え方がある。「資本としての人」と考えるとマイナスだろう。人が減ると組織が回らなくなり、ものを買う人も減り、消費が滞ってマーケットが縮小していく。

資本ではなく「資源としての人」と考えると、ものごとが違うように見えてくる。人が減ると個人の役割が増えてくるので、やり甲斐が出てきて、人間らしい生活、豊かな暮らしにスポットが当たるようになる。

人口減少をどう考えるかという意味では、今は「資源としての人」という考え方が広がって来ているように思う。特にコロナ禍では、リモートワーク等が増えるにつれて、会社視点から、社会視点になる。自分と家族のあり方、街のあり方などに触れる機会が増える。

地方のあり方という意味では、昨年の学校蔵のテーマを「人が減ってもできること」として、人というものを資本ではなく、資源であるということを出発点にして考えた。そうすることで、物の見方が変わってくるだろう。



酒造りのエネルギーも太陽光パネルで

コロナ禍以降に明白になっているのは、グローバルな大量生産や大量消費からの脱却だ。平均化した同じものがたくさん入手出来るのが生活の善である段階は過ぎた。小さくとも、思い入れの強い物、特別にオリジナルな物、誰かに必要な物という物に価値が出来てくると思う。そういう物や人をいかに生み出すかという考え方が変わっていくと思う。少なくとも、そう考える人が増えていくと思う。

探究的で創造的な学習への 転換について

学校現場では課題解決型の探究的で創造的な学習への転換が求められているが、課題というのは実社会の中でどんな変わっていくので、生徒たちに届く時点ですでにタイムラグを生じてしまうというリスクもある。例えば、あの時はマスクが必要だったけれども、配られた時は状況が改善して皆が持っていましたというのに似ている。

もう一つは、作っている側の課題と実際に現場にいる人との課題にずれがある場合もある。例えば、東京にいる人が地方の課題はこれだよと言っても、住んでいる人たちにとって、それは全然課題ではないよということもある。

探究的で創造的な学習が必要だと言われているが、そのためにはどうしたら良いかという、一つの方法は用意された課題ではなく、自分で課題を見つけていくということが大事。自分が興味があることではないと、探究的に創造的になんてできないと思う。誰にとっても見えてくるわかりやすい社会課題ではなく、もっ

と地域的な個人的な感覚からの視点を磨くことが必要。

それらを引き出すために、質問の仕方を変えるのも一つの方法。君にとって、「この街で変えたいものは何?」とか、「この一週間で街中で、困ったことって何?」とか、子供たちにとって一番興味のあるものを引き出す質問に変えることによって、大人もびっくりな探究的で創造的な学習能力を子供たちが発揮するのではないかと思ったりもしている。学校でもらう宿題というのは、こなすもので大抵楽しくはない。課題解決力を伸ばすには質問力の向上が大事である。先生の質問力もだけれど、子供たちが自分自身に問いかける質問力を磨ききつかけになると良い。

今は親もリモートなどで家にいる機会が多いので、コロナって何なんだろうと家族で考えるいい機会かもしれない。人間はいつかは死ぬけれども、最後の最後までコロナでびくびくするのは嫌だと思ふ、そういう世の中にならないようにするためにどうしたらよいか、と子供に聞いてみるとよい。

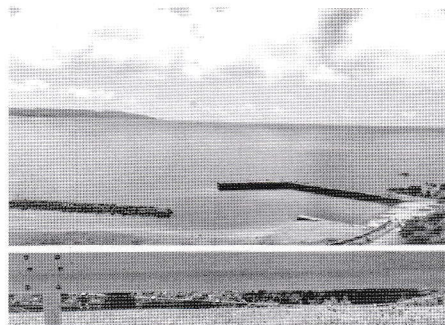
もう、いいかげん「コロナのせいだ」というのはやめようと思う。やらなければいけないことは、コロナがあってもなくてもやらなければならぬ。ニュースの中に答えがあるわけではなく、答えはいつでも自分の中にある。正しく恐れて自分の中にある答えを見つけようという姿勢が大切だと思う。

学校へのメッセージを一言

今まで効率、生産性を追い求めてきた

成長の時代であった。しかし、日本酒は効率化や生産性だけでは生まれない価値を生むものだ。学校も同じだと思う。そして、日本酒も学校もブランドを持つていると思う。ブランドとは、歴史、品質、信頼、様々あるが、もう一つ欠かせないのは、そこに期待を寄せる人達に支えられているということだ。学校は地域に期待され、地域から応援されている。だからこそ、いつまでも残って欲しい場所である。そんな学校で学ぶ子供達には、様々な経験をしたいってほしい。その経験が道を拓く。

「答えはいつも自分の中にある」。



日本で一番きれいな夕日が見える海

※尾畑留美子様を講師に迎えての「夏季大学講座」は令和三年七月三十一日(土)に実施する予定です。どうぞお楽しみに・・・

※なお、本掲載文は、新潟教育会のHPにも掲載しておりますので、どうぞご覧ください。

第12回「教師力アップ講座」

○日時 令和2年11月7日(土)
○会場 新潟教育会館
○参加者 延べ24人

「新型コロナウイルス対策」のために延期していた標記の講座を開催しました。この講座の特徴は、参加型の研修、受講選択制の研修、すぐに役立つ研修の三つです。本年は、二講座を実施しました。講座内容等の詳細は、新潟研究所発行の「所報」をご覧ください。

第1講座

「特別な支援を必要とする子がいる」

学級経営・学習指導

「UDLの考え方を」

取り入れて」

講師 古田島 恵津子 様

加茂市立加茂西小学校 校長



第2講座

「学年に応じた外国語の授業づくり」

「育てたい資質・能力を」

どう育てるか」

講師 村上 大樹 様

新潟市立味方小学校 教頭

新潟市小学校英語教育

推進リーダー



保護者のための カウンセリング講座

子どもの話をいざ聴こうとなると、うまくかわりができない等の話をよく聞きます。これらの現状をふまえ、効果的な話の聴き方について研修します。

小中学校の保護者の方で、①PTAやグループで研修の講師を探している方、②個別に相談したいと思っている方を対象に、ご希望の会場に向く「子育て出前講座」に形を変えて、今年度は実施しています。

特別支援教育助成金授与式

○日時 令和2年11月20日(金)
○会場 新潟教育会館

本年度の特別支援教育助成校六校に対する「助成金授与式」が開催されました。該当六校は、各地区の特別支援教育担当指導主事から推薦されてきた学校の中から、選考委員会(9月)で審査され、理事会(10月)を経て決定されました。この事業は、昭和47年以来続いているもので、助成した学校は、369校にのぼっています。

当会では、これからも県内の特別支援教育に努力されている学校に対する助成を継続したいと考えています。

なお、助成された学校の取り組みについては、当会発行の「新潟教育会報」第96号(令和3年6月発行予定)に掲載いたします。



令和2年度 特別支援教育助成校

■小学校(3校)

- 1 刈羽村立刈羽小学校
- 2 燕市立燕西小学校
- 3 新潟市立真砂小学校

■中学校(3校)

- 1 上越市立城西中学校
- 2 佐渡市立両津中学校
- 3 新潟市立小須戸中学校

あとがき

▼「新型コロナウイルス」の感染防止のため、計画していた事業の多くが中止や延期となつてしまひ断腸の思いです。

▼「夏季大学講座」の講師に予定されていた、尾畑留美子様からの貴重なご提言を掲載することができました。

▼第95号の巻頭写真、中野洋吉様のタイトルに誤りがありました。

(誤) 三頭火の句↓(正) 山頭火の句
訂正してお詫びいたします。

